



Reproduce Naha City with Us!

私たちと一緒に「新しい那覇」をプロデュースしませんか？

観るがよい、 那覇の世界級を



for Media / Travel Agent

世界がここでつながる、那覇。

The world connects here, Naha.

NAHA STORY～那覇が舞台の3つの物語～

那覇を巡る新たな物語がはじまります。

若狭ゾーン
story

龍の約束

国際通りゾーン
story

きっぱんと器

首里ゾーン
story

スマホ／オフ

平成29年度「物語性のあるランドマーク創造事業」

那覇市

平成29年度「物語性のあるランドマーク創造事業」

那覇市

発行 / 那覇市経済観光部 観光課
那覇市泉崎1丁目1番1号 TEL: (098) 862-3276

制作 / ブルームーンパートナーズ(株)
ストーリー制作・監修 / 賀数 仁然・知念だしんいちろう

那覇市には、知る人ぞ知る
隠れた魅力が満載なことをご存じですか？

世界遺産
だけでなく、**「世界級」**の観光資源。

Instagram インスタ映え間違いなしの
「フォトジェニックスポット」の数々。

那覇市に訪れたら外せない
おきなわ
グルメの**「琉球八食」**。
新定番、

そして、那覇の観光資源7種の
個性的なキャラクター達をあしらった
「なは土産・龍柱会議」。

たくさんの魅力がつまった那覇市ですが
残念ながらまだまだその魅力は全世界の人々に十分伝わっていません。

そこで、那覇市の魅力を発掘しつなぎ合わせることで、
**「新たな観光商品やサービスを
開発し盛り上げていきたい」**。

そんな想いでこのガイドブックを制作しました。

本ガイドブックでは、那覇市を3つのゾーンに分け「隠れた魅力」を物語に登場させながらご紹介します。

その名も「NAHA STORY～那覇が舞台の3つの物語～」。

物語の登場人物が那覇市の様々な場所を訪れ、その魅力に感動し、市民のソウルフードに舌鼓を打ち、
人々と触れ合い癒されていく…。那覇市の隠れた楽しみ方が3つの物語を読めば広がります。

「知らなかった那覇の楽しみ方」をまるで物語の登場人物になったように巡る――

まさに、那覇市の魅力を凝縮し、体感できる一冊です。

観るがよい、



さいおん
うふシーサー

世界一の豊原焼シーサー（牧手駅前広場）。
シーサーはライオンをモデルとする架空の動物で
広く沖縄県民に親しまれている。
高さ3.4m。那覇のまちの守り神として
兄弟「豊原うふシーサー」とともに誕生

MAP-010C2

那覇市が強力にバックアップ、
那覇の魅力4つのご紹介。



P36

World Class - Naha

1 「観るがよい、那覇の世界級を」

世界に誇る「那覇の世界級」を写真とともにご紹介します。
那覇を訪れる観光客の方へご注目いただきたい
ポイントをわかりやすく説明しています。



P32

Ryukyu 8 Foods

3 琉球八食 ～那覇のイチオシ 鉄板グルメ&NEW グルメ！～

那覇市民のソウルフード、那覇で食べる美味しいもの。
那覇市が推薦したい「琉球八食」を代表的な
お店の情報とともにご紹介します。



P30

Naha Photogenic Point

2 フォトジェニック10選

那覇市内の数あるフォトジェニックポイントから厳選。
周辺観光地と合わせた「沖縄」「那覇」を
テーマにした特集や企画等ぜひご活用ください。



P34

Must-buy items in Naha

4 「なは土産・龍柱会議」～那覇を訪れたなら要チェック～

那覇市「新商品開発支援事業（平成29年度）」で誕生したブランド！
観光資源7種のキモかわいいキャラクターをあしらった「龍柱会議」。
個性的なキャラクターとのコラボ企画はいかがですか。

NAHA STORY

～那覇が舞台の3つの物語～

時代背景も主人公の年齢層も異なる3つのストーリーが、実は「龍」というキーワードで深くつながっている。
物語を読みながら、登場人物の目線で那覇の魅力を感じられる構成。

若狭ゾーン
story

龍の約束

ここを目的に訪れる観光客が少ないゾーンながら、龍柱をはじめ異文化とのつながりを感じさせる興味深いエリア。琉球王国（現在の沖縄）の中心であった那覇に繰り広げられていた歴史背景を絡めながら、龍柱の秘密が明かされる。

国際通りゾーン
story

きっぱんと器

ノスタルジックな昭和の雰囲気を感じてもらえるよう、昭和生まれ世代である50～60代の中高年をメインに据えたストーリーを展開。「国際通り＝おみやげショッピング」だけではない、すーじ小（すーじぐわー、沖縄言葉で小道、細い路地の意）の魅力やグルメも伝える。

首里ゾーン
story

スマホ / オフ

琉球の歴史や世界遺産を目当てに首里城公園を訪れる中高年や歴史ヲタクだけではなく、インスタを常用している若者にもエリアの魅力を知ってもらえるよう、若者を主人公にスマホを絡めてストーリーを展開。

NAHA STORY

～那覇が舞台の3つの物語～

古の息吹を感じる世界遺産 首里城、
様々な文化が交錯する国際通り、
そして今もなお多くの旅人が行き交う港町若狭。
「琉球」として特別な歴史を紡いできた
沖縄・那覇市を舞台に
時代も世代も異なる男女が繰り広げる
3つの物語。



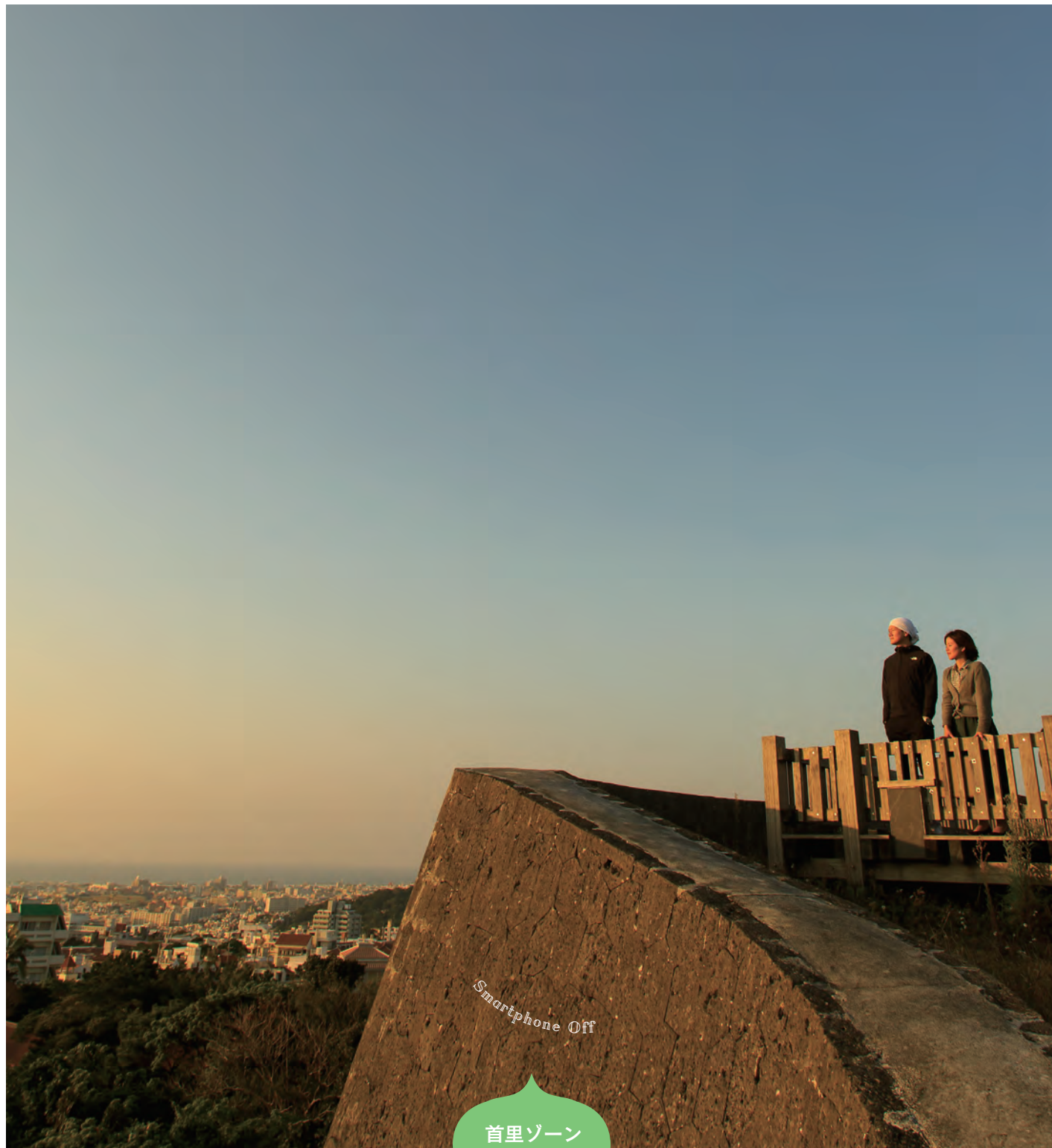
～那覇 首里城から若狭へ通る龍脈～

古くより、大地はひとつの生命体とみなされていた。そこには血流のように「気の流れ」が存在し、あたかも龍のように見えることから「龍脈」と呼ばれる。

風水思想では龍脈をうまく使うと土地が繁栄するとされ、琉球は積極的にこれを取り入れた。三方山に囲まれた水系の王都「首里」は龍脈の通る真ん中に位置している。

また、龍脈上に形成された久米大通りを中心に中華系集落（久米村・クニンダ）が造られていたこと等、那覇においては琉球王国時代、都市計画にまで龍脈を応用していたのだ。

これが、首里城から若狭にかけて龍脈が通っている、とされている所以である。



◆登場人物

比嘉 龍太／沖縄県在住 25歳 壺屋焼陶工
津島 舞／東京都在住 25歳 会社員

首里ゾーン
story

スマホ／オフ

世界遺産を目当てに首里城公園を訪れる中高年や歴史ヲタクだけではなく、インスタグラムを常用している若者にもエリアの魅力を知ってもらえるよう、若者を主人公にスマホを絡めてストーリーを展開。

◆那覇空港

「でもさ、2人でいても舞はずっとスマホ見てるさ。あれは好きじゃない」

那覇空港で人気の**ポークたまごおにぎり**の行列に並びながら、舞の頭の中では龍太の言葉が何度も再生されていた…。

東京在住の津島舞は高校の修学旅行で沖縄にハマリ、社会人になってからは年に何度もの島を訪れている。去年の沖縄旅行で知り合った比嘉龍太は、壺屋焼の陶工として働くうちなーんちゅ。沖縄滞在中に付き合いが始まり、そのため舞はこの1年で6回という過去最高ペースで沖縄に来ている。

今日は2人が付き合い始めてちょうど1年の記念日。この日に合わせて舞は沖縄旅行の日程を組み、毎日龍太に「LINEで旅の計画を送っていた。しかし、龍太はスマホを持ってはいるものの、ほとんど触れず、たとえ家に忘れても一切気にしない。そんな性格なので返信はほぼ、ない。

防水ケースに入れて風呂でもスマホを離さない舞にとつて、その感覚はとても同い年とは思えなかった。そのせいで昨晚もケンカをした。

LINEの画面には舞からのメッセージだけが溜まっていき、既読さえ付かない。

そんな状態に苛立ちがピークを迎えた舞は、深夜になって電話を掛けた。

「はーい。なにー？」



ポークたまごおにぎり

いつも通りの気の抜けた龍太の声。

「ねえ、どうしてLINE見ないの？明日からの予定、送ってるし」

「ああ、うん。あとで見るよ」

「…アタシ、明日早いからもう寝ちゃうよ。」

「そっかー、おやすみ」

その態度に舞の不満は爆発し、龍太を責める言葉がとめどなく溢れ出した。

1600 km離れた遠距離恋愛でも、スマホがあればいつでも繋がっていると信じていたのに…。口撃を緩めない舞が短い息継ぎをした瞬間、狙っていたかのように龍太が

口を開いた。

「でもさ、」

——— やつと行列の最前列にたどり着き、『ポーたま』を注文する舞。財布を取り出す舞の頭の中でまたあの言葉がリピートされる。

「でもさ、2人でいても舞はずっとスマホ見てるさ。あれは好きじゃない」

その後続けて龍太はこう言ったのだった。

「ねえ、たまにはスマホを一切見ずに、沖縄を覗いてみない？」

◆ゆいレール

那覇空港駅のホームで舞はスマホの電源を切った。

昨夜、龍太が提案したのはスマホを一切使わずに沖縄で待ち合わせをするというゲーム。電話を切ったあと、珍しく届いた龍太からの「LINEには、「待ち合わせの場所は（いりのあざな）。スマホで調べちゃダメ。人に直接聞くのはアリ。んじゃ、ずっと待ってるねというルールが書いてあった。

「大丈夫、なんとかなる！」

気合を入れたつもりだったが、真つ暗になったスマホの画面には不安を隠せない自分の顔が映っている。

「いりのあざな、いりのあざな…」

唯一のキーワードを忘れないように繰り返しているところへゆいレールが到着し、舞は



ゆいレール那覇空港駅

慌てて乗り込んだ。

走り出した電車の車窓から見える空は、海との境目が分からないほどに青い。

「インスタに載せたいな」

と思ったが、当然スマホは使えない。以前、舞は龍太に無理矢理インスタグラムのアカウントを登録させたことがあった。

「龍太の作った壺屋焼、インスタにアップしてよ！」

そつ言ったのだが、もちろん未だに1枚の写真もあがった事はない…。

◆儀保駅周辺

那覇空港駅を出発しておよそ25分。舞は終着1つ手前の儀保駅で電車を降りた。

【いりのあざなへのヒントは首里にあるは



宝口樋川



ず、という直感のみでの行動だ。龍太は那覇市内の泊というところにある古いアパートに住んでいるが、首里の町が大好きでこの町がいかにも奥深く歴史ある場所かをよく舞に話していた。

本来、首里を探索するならひとつ先の首里駅で降りる方がいいのかもしれないが、スマホの地図が使えない舞にとっては降りたことのない駅よりも、龍太と何度か訪れたことのあるこの駅からスタートする方が安心

は絶品だった。クセがなく、あつさりしているのにダシが効いていて香りもいい。なによりも豆腐がフワフワで喉をするりと通り抜けていく。

「あー美味しいー」
「一気にゆしどつふそばを食べきた舞は、思わず声に出してそう言ってしまった。」
「こんなに美味しいそば、龍太と食べたかったな……」

この食堂を教えてください学生カップルの仲睦まじい姿を思い出しながら呟く。

「はあ……【いりのあざな】ってどこなんだろ



龍潭

な気がした。駅を出て、たまたま通りかかった年配の女性に思い切つて声を掛けた。

「あのー、【いりのあざな】ってどこですか？すぐ綺麗な場所らしいんですけど」

「あいーなんだっけ？聞いた事あるけど。だー、出てこないさー綺麗なところなら、この近くにある宝口のヒージャーもいいさね。あいーヒージャーって言ってもヤギの事じゃないからね。あはははー水が出ているところよ」

沖繩のおばちゃんは元気で豪快だ。その女性が教えてくれた方向へ進んでいくと、**宝口樋川**と彫られた石柱が建っていた。

案内の通りに脇道に入ると緩やかに下る石段があり、そこを下りていくと開けた場所に立派な石碑があり、その隣は石で囲われた洗い場のようになっていた。石垣からは確かに水が溢れ出している。

「ほんと綺麗なところ。大きな通りからちょっと入っただけでこんな場所があるんだ……」しばらく水の流れる音に耳を傾けていたが、ここに龍太はいない。

この町にはこんな普通の宮みに紛れた美しい空間がたくさんあるのかもしれない……舞はそんなことを思いながら、宝口樋川を後にした。

交通量の多い大通りに戻ると、時刻は午後1時を過ぎていた。
「これからどうしよう……やっぱり首里城の近くかな」

う。古い方言なのかな、今は違う呼び方だったり。もしかして、神聖な場所で普通の人は立ち寄らないとか!?」

考えを巡らせながらレジでお金を払い、ついでに店員に聞いてみた。
「この近くに歴史的な場所とか神聖な場所ってありませんか？」

「首里は歴史的な場所だらけですからね。うーん、神聖な場所かどうかはわからないけど、この先に行くと昔からのシーサーはありますよ」

「昔からのシーサー!?そこかもしれない！」

崎山付近

「そうだーシーサーだよーなんでもっと早く思いつかなかったんだろっ」

食堂を出てからの舞の足取りは、明らかに力強くなっていた。
「龍太は壺屋焼の職人なんだから。沖繩の焼き物と言えばシーサーでしょっ」

龍太が働く壺屋やちむん通里にも『つふシーサー』という巨大なシーサーがシンボルとして設置されている。舞と龍太は何度もその前で写真を撮った事があった。

「【いりのあざな】はシーサーの名前なんだ！昔からの古いシーサーの前で待ち合わせだなんて、私たちにピッタリじゃん！」

正解に近づいた気がして早速で進む舞だったが、小さな十字路を通り過ぎたところでふと立ち止まって振り返った。視界に入った

なんとなく、待ち合わせ場所の【いりのあざな】も首里城の近くにあるような気がして、舞は儀保駅から見上げるように小高い丘の上に建つ首里城を目指して歩き始めた。

玉那覇味噌醤油工場

首里城の見える方へ細い坂道を上っていくと、右手に古い石垣が見えてきた。

緑で覆い尽くされた石垣の上には垂熱帯らしいシダ系の観葉植物のような木々が茂っている。かなり大きな屋敷のようで、低くて大きな瓦屋根の下にどしりと構えた家屋の入り口には、**玉那覇味噌醤油工場**の看板が掲げられている。舞は霽囲気のある佇まいに思わず写真を撮りたくなったが、

「スマホは絶対に使わない！」と、坂道をさらに上っていった。
誰にも見られてはいないが、約束を破ると後悔しそうで嫌だった。

鳥堀付近

住宅街の細い道から開けた場所へ出ると、そこは首里城の真下、**龍潭池**の前だった。

「あ、お腹空いてきた……」

パークたまごおにぎりは食べたが、お昼はとくに過ぎてもう14時前だ。舞はついでお昼ごはんの情報も得ようと、通りかかった若いカップルに声を掛けた。
「すみません、この近くで【いりのあざな】っ

店がどうしても気になったのだ。

その店は十字路の角にあり、アルミサッシのガラスドアから中の様子が丸見えだった。ガラスには赤字で**カタチキ**と書かれている。中では女性がなにやら作業をしていた。

「あ、**紅型**だ……」

舞は沖繩の工芸の中でも紅型が特に好きだ。龍太の影響もあってもちろんやちむんも好きなのだが、紅型の鮮やかさと独特な絵柄はいつも舞の心を惹きつける。カタチキは工房と店舗が一緒になっているようで、中に入ると作業場の反対側に様々な紅型製品が並べられている。ストールやトートバッグ、

コースターから、蝶ネクタイまで、どれも可愛らしさの中に上品さが滲み出ている。赤瓦の屋根とハイビスカスが染められた味のある絵柄のブックカバーも素敵だ。

「うちは染めから縫製まで全部手作業でやってるんですよ」
さつきまで作業をしていた女性が話しかけてきた。

「どれも素敵ですね。このブックカバー、好きの母へのお土産にいいなと思って」と返したものの、今は龍太との待ち合わせ場所へたどり着くのが先だ。

「あのー、後でまた寄ってもいいですか？今、待ち合わせのシーサーまで行かなくちゃいけないって」

「もちろんです。シーサーって、すぐこの先にある古いシーサー？」
「たぶんそれですよーやっぱりあるんですね！」

ていう場所知りませんか？」

「ちょっと聞いた事ないですねえ。ごめんなさい、私たちも今年から大学で来てるんで……」

話を聞くと、すぐ近くにある沖縄県立芸術大学の学生らしい。
「そっかあ。あ、じゃあお昼食べられるところ知りませんか？美味しいところ！」

舞が質問を変えると、女性の方が答えた。
『ゆしどつふそば』とかどうですか？この先を行ったところにある**ななほし☆食堂**、オススメです」

教えられた方向へ10分ほど歩くと、ななほし☆食堂が見えてきた。

割と新しい建物で清潔感がある。店内へ入ると、お昼時は過ぎていたのにも関わらず、多くの客でテーブルが埋まっていた。席に着いてメニューを見ると、最初に『ゆしどつふ』のカテゴリが目に入る。舞は迷わずゆしどつふそばを頼んだ。

しばらくして運ばれて来たゆしどつふそば



御茶屋御殿石造獅子



カタチキ 紅型 × ミシン

「うちゃや、うどぅん、いしじし…」

うちゃやうしんせきうしし
御茶屋御殿石造獅子と書かれた説明文には

丁寧に読み仮名まで振られていた。

「うそ、【いりのあざな】じゃないの？ええ〜!!」

これまで歩き続けてきた疲れが一気に身体を襲ってきた。石のシーサーの前で座り込んでしまった舞はしばらく呆然としていた。

我に返った舞が説明文を読むと、この石獅子は昔の写真を元に復元された物で、元々あったものは沖縄戦で破壊されたと書かれている。

隣にはアメノクサキ雨乞御嶽と言われる拝所もあり、琉球王国時代に文字通り雨乞いの祈願をしていたらしい。この拝所も周りの石積みなどが割と新しく見える。

「これも復元なのかな？戦争では首里城も激戦地だったって、龍太が言ってたな…」

舞はしばらく見晴らしの良いこの場所から眼下に広がるたくさんの方々の眺めていた。

首里金城町

時計を見ると16時半近くになっていた。足も身体もさっきの石獅子が乗っているかのようになり重い。トボトボと歩いていた舞の鼻先を独特な甘い香りがかすめていった。

「ん？この匂い…」
見ると目の前にミゼン瑞泉酒造の看板が出ている。泡盛を醸造している酒造所だ。

タイ米を蒸す甘い香りを感じながら、舞は結局【いりのあざな】は分からず、足はパンでもう歩けない。
空はオレンジ色に変わり、もうすぐ日が沈む事を教えてくれている。

頬を熱い何かがつたい落ちる。舞は自分でも気づかないうちに泣いていた。その事にびっくりしていたら、涙が止まらなくなった。

こんなに辛い沖縄は、こんなに寂しい沖縄は、初めてだ。

「なんで龍太はこんなことさせたんだろう。もう、私のこと好きじゃないのかな…もうルールなんてどうでもいい」

舞は涙を拭くことをやめて、バッグからスマホを取り出し電源を入れた。

すると、ホーム画面にインスタグラムの通知が届いている。開いてみると、舞が無理やり作らせた龍太のアカウントに写真がアップされていた。
たった1枚の写真。それはオレンジ色に染まった景色だった。手前に茂る緑色のはずの木々も見下ろしている街のビルも、遠くに映る海さえも、全てがオレンジの世界。

「これ…この場所、知ってる！」
舞は立ち上がり、石畳を駆け登る。まだ涙の乾かない頬をキラキラとオレンジに光らせながら、真っ直ぐと首里城に向かって走り始めた。

西のアザナ



瑞泉酒造



真珠道



首里金城村屋

龍太との会話を思い出していた。

「舞のお父さんにオレの作った抱瓶に泡盛入れてプレゼントしたら喜ぶかなあ」

「龍太のやちむんに入れたらどんなお酒も美味しくなるよ。お父さんきつと酔っ払っちゃうなあ」

笑顔でそう言った舞に龍太は照れた表情を見せていた。そんな事を思い返していたら龍太との思い出がどんどん溢れてくる。いつも龍太は舞に沖縄の話をしてくれていた。大好きな沖縄の、大好きな首里にどんな場所があつて、どんな歴史があつて、どんな人たちが住んでいるか。いつも真っ黒な顔にくつきりと笑いつわを浮かべながら話してくれた。

それを舞は一生懸命聞いていた…はずだった。



そのひやんうたきいしもん
園比屋武御嶽石門の前を通り抜けて首里城正殿の前まで行き、そこから逆方向へ進む。石垣沿いに奥へ向かいその先の緑を抜けると、那覇の街が一望できる。

そして、そこに龍太が待っていた。
「ちょうどいい時間に間に合ったね」

相変わらずの真っ黒な顔が逆光でさらに黒く見える。

「何が？何が、いい時間つて…」

舞は言いたいことがたくさんあるが、息が切れてうまく話せない。

「今、いっちゃん綺麗な時間。西(いり)のアザナ、よく分かったな」

「ここ、ここは、龍太が告白してくれたところだから」

「…あ、覚えてた？」
「当然でしょー」

「よかった。ちゃんと来てくれて」
「あの、でも…ごめん！私、結局スマホ見ちゃった。そしたら、この写真が…」

たのに、ぼんやりとしか思い出せない。

「あんなにたくさん話してくれたのに、私は何を聞いていたんだろう」

次の行き先を調べて、翌日のスケジュールを確認して、天気予報をチェックして…。撮った写真を整理して、友達からのLINEに返事を…。いつもスマホを握ったまま…。

「龍太に、会いたいな」
どれくらい歩いていたのだろうか。

舞がふと顔を上げると、見たことのある風景があつた。

「あ、この道来たことある。この先にえーと、確か石畳があつたような…」

なま靡けな記憶を頼りに進んで行くと、しりせん首里金城町石畳道に突き当たった。

すると先の方に数人が固まって居るのが目

「オレも…ここですーつと待っててからさあずーつと舞のこと考えながら。して夕焼けになってさ、でーじ綺麗で、この景色を舞に見せたいと思って、我慢できなくて、やつちゃった…初めてのインスタ」
夕焼けは雲と混ざり合い、オレンジからピンクへとグラデーションを作り出していた。
やつと息が整って来た舞は、龍太の隣に並んだ。

「龍太、ごめんね。私、龍太のことも沖縄のことも、見ているようでちゃんと見てなかったかも」
夕陽がどんどん水平線に吸い込まれていき、その光に染められた雲同士が重なり合い、まるで2体の龍のように見えた。

海が静かにそれを受け止めている。
もう何百年も昔から、ここにあつた風景。しかし、一度として同じものはない。

龍太は思った。約束を果たしたのは、舞ではなく自分であつた。

いつか、ここで果たす約束をもつ何百年も待つていたような気分になった。

「オレはさあ、伝えているようで伝えられてなかったはず。自分の思いさえあれば届くと思つてたけど、それは身勝手だな」

「なんで？」
「オレだけじゃないから」

「舞が居ての、オレだから」
「うん…ん？どういうこと？」
「わからんばー…いいよ、わからんぐらいが

に入った。近づいてみるとどうやらこの辺りを歴史散策している人々のようだった。
ひと際大きな声で喋っているのはガイドだろうか。

「ここは、しゅりかなぐしくむらやーと言いまして、えー、まあ休憩所なんですけどね…」

陽気な男性ガイドの声につられて、舞もいつのまにか輪の中に入つて話を聞いていた。

すると、ガイドが舞に気付き、
「あい、お姉ちゃん大丈夫ね？いろいろおじゃーないよ。うり、これ食べなさい？」

手渡されたのは黒糖だった。

「あ、ありがとございます…」
舞は言われるがままに口に入れた。優しい甘さが口の中に広がり、少し元気になった気がした。

「あーあの…」
その場を離れようとするガイドを舞は呼び止めた。

「なんね？」
「あの、その、【いりのあざな】…」

「あー黒糖代はいらないよーサービスービス。そのかわり今度沖縄来るときは僕の歴史ツアーに参加しなさいね」

そう言つて歴史散策ツアーの人々は足早にその場を去つて行った。

「もう！あの人なら知つてると思つたのに！」
再び1人になった舞は石畳の上に座り込んでしまった。

いいよ。先は長いし。あ、あと、インスタも悪くないな」

「でしよーそうでしよーこれからは龍太のやちむん、アップしてね」

「気が向いたらね」
「えー…じゃあLINEは返してね」

「気が向いたらね」
「えー泣かすんどー」

「おお、うちなーんちゅっぽくなつてるー」
すっかり日が沈んだ西のアザナで、舞はもう一度スマホの電源を切った。

電話もLINEも繋がらないけれど、代わりにその手は、龍太の日に焼けた手と繋がっている。

(おわり)

ストーリー制作: 知念しんいちろう
監修: 眞数仁然
この物語は史実に基づいた内容を元にしたフィクションです。

※写真注釈
「国営沖縄記念公園(首里城公園)：西のアザナ」
「国営沖縄記念公園(首里城公園)：龍潭」





首里
ゾーン

「スマホ/オフ」を巡る



3

龍潭

(りゅうたん)

1427年に造られた人工の池。尚巴志(しょうはし・琉球で最初の統一王朝を樹立した国王)が冊封使を接待するために国相の壊樓(かいき)に命じ造らせた。亀や珍しい鳥バリケンが多く生息、晴れた日には首里城が水面に美しく映される。

【写真 国営沖縄記念公園(首里城公園):龍潭】

📍 近隣有料駐車場



4

カタチキ 紅型 × ミシン

姉妹運営の紅型工房。沖縄の何気ない色や風習、日常を紅型に取り入れている。紅型の伝統技法や材料をしっかりと守りながら、すべて手染めで染色。ストールやバッグなど大切な方へのお土産に。

☎098-911-8604

🕒 営業時間 10:00 ~ 16:00

📅 日曜・祝 📍 あり(普通1台)



5

御茶屋御殿石造獅子

(うちゃやうどうんせきぞうし)

1677年に造られた王府の別邸「御茶屋御殿」(現・首里カトリック教会)に火避けの獅子として置かれた。御殿では茶道、生花、武芸などの様々な芸能が行われ、国王が遊覧し、冊封使などを歓待したという。がけ崩れの恐れがあったため現在の場所に移動。那覇市指定文化財。

📍 あり



6

崎山公園・雨乞嶽

(あまごいうたき)

高台にある公園からは那覇の街が見渡せる。御茶屋御殿石造獅子に隣接する雨乞嶽(あまごいたき)近くからの眺めもおすすめ。夜景スポットとしても有名。やや道が狭いため、特に夜は十分注意して訪れよう。

📍 あり



7

瑞泉酒造株式会社

1887年に創業、琉球泡盛の製造販売元。酒蔵見学が可能。「瑞泉」の名前は創始者喜屋武幸永氏が首里城内のこんこんと湧き出る泉の名称から名付けた。水は龍頭を形取った樋口からでてくるため通称「龍樋」と呼ばれる。首里の地で受け継がれる泡盛を味わおう。

☎098-884-1968

🕒 9:00 ~ 17:20(受付時間 9:00 ~ 17:00)

📅 第2・4土曜、日曜、祝 📍 あり



8

首里金城町石畳道

首里から港や本島南部へ通じる主要道路として、16世紀に造られた「真珠道(まだまみち)」の一部。当時約10キロにも及んだが、今は金城町に300メートル残るのみ。蔦の生えた石垣や赤瓦の民家など王国時代の面影を残し、周辺では御嶽や井戸(ガー)などの史跡を見ることができる。

📍 近隣あり「交通広場」(普通車約10台)



1

宝口樋川

(たからぐちひーじゃー)

真嘉比川沿いがけの下、石積みで頑丈に作られた共同の湧き水をくみ取る場所。那覇市指定史跡。1807年に作られたとされ、その豊かな水は干ばつにも枯れることがなかったという。市内でも指折りの湧水量を誇る。

📍 近隣なし



2

有限会社 玉那覇味噌醤油

創業160余年、天然酵母で無添加の手づくり味噌。四季の移り変わりを経て、ゆっくりと熟成させる天然醸造。コク・香り・旨みの違いを感じることができる。首里の台所に並ぶ伝統の味。

☎098-884-1972

🕒 9:00 ~ 17:30

📅 土・日曜・祝日

📍 Pあり(普通2~3台)



9

首里金城村屋

(しゅりかなぐくむらやー)

首里金城町石畳道の休憩所、地域住民の憩いの場。ガジュマルの木の下にある沖縄古民家風建築物。無料休息可能(トイレ、座敷有)。CM撮影・婚礼写真など指定管理者に利用許可申請書提出の上可能(1000円/1時間)。地域集会などもあるため節度を持って利用しよう。

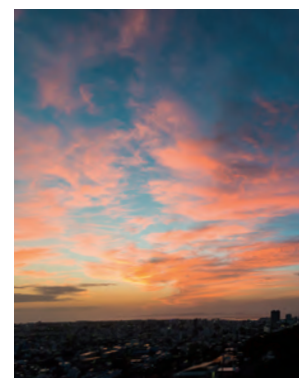
開館時間 9:00 ~ 18:00

🕒 年中無休(臨時休業あり)

📍 近隣あり「交通広場」(普通車約10台)

☎ 指定管理者 首里金城町自治会

090-1348-2070



10

西(いり)のアザナ

首里城公園敷地には「東のアザナ」と「西のアザナ」がある。「アザナ」とは、遠くを見渡すために設けられた物見台のこと。標高約130メートルの場所に築かれており、那覇市街地を一望、晴れの日は海を越え慶良間諸島まで見渡せる。【写真 国営沖縄記念公園(首里城公園):西のアザナ】

📍 首里城公園駐車場



国際通りゾーン
story

◆登場人物

津島 武夫 北海道出身東京都在住 58歳
会社員 舞の父
津島加奈子 東京都出身東京都在住 55歳
主婦 舞の母 向田邦子のファン
津島 舞 東京都出身 25歳 会社員

きつぱんと器

ノスタルジックな昭和の雰囲気を感じてもらえるよう、昭和生まれ世代である50〜60代の中高年をメインに据えたストーリーを展開。「国際通り」おみやげショップだけでなく、すーじ小（すーじぐわー、沖縄言葉で小道、細い路地の意）の魅力やグルメも伝える。

旅のキツカケ

連休は突如として沖縄旅行に決まったらしい。
らしいというのは、例によって妻の加奈子が、旅行計画を進めているからだ。

なぜ、急に沖縄なのか？東京から行ける温泉でもないのではないか。

「けなげな女房をもった亭主は、女房に死なれたら哀れなんだって。私にもしものことがあつたらあなた大変よ。楽しんでいられるのは今のうちなんだから・・・あ、向田さんが書いていたんだけどね」

加奈子は私の質問に茶目つ気たつぷりに答えながら、せつせと旅の支度を進めている。僕は知っていた。彼女が急に沖縄旅行を言い出したのは、図書館から借りてきた向田邦子のエッセイ『沖縄胃袋旅行』（※1）を読んだからだった。

食通でもあった向田邦子のこのエッセイは、彼女が寸暇を惜しんで出かけた沖縄の魅力が満載のようである。

「さ、明日は早いよ。きつぱん探しにいざ、南の島へ」

「きつぱん？」
加奈子は自分の準備だけは整ったようで、ガチャんとトランクを開めるとなずいた。

国際通り

娘の舞に見送られ、飛行機で2時間ほど揺られて目が覚めると、そこは沖縄だった。

南国の強い光は、逆に夢の中にいるようだ。メインストリートの**国際通り**近くのホテルに着くと、荷を解いた。

「さて、どうしよう」

そんな顔をしている僕に

「この近くの平和通りに向かい、公設市場をのぞきます。まずは沖縄の食材を確認、この本に」

ニヤリと笑う加奈子の片手には、やっぱり向田の本があった。どうやら、書いてあることを全部なぞるつもりらしい。

「30年も昔に書かれた本だから今もこの通りかどうか分からないけど、違いを感じるのも楽しいと思うのよ」

初めての沖縄旅行なのに違いを比較するなんて、加奈子らしくってなんだか僕も楽しくなってきた。

桜坂

僕は、平和通りへの抜け道である**桜坂通り**にやってきました。

レトロなバーや、懐かしさが残る映画館がある。

「ここ、**桜坂劇場**だって・・・」
ちょうど沖縄返還の時のドキュメンタリー

平和通り

映画をやっていた。映画館が独自の路線で興味深い作品を選び上映をしているらしい。また、映画館なのに2階には『やむん』と呼ばれる沖縄の焼き物や工芸品が販売されている。

近くには、ステーキ屋、沖縄そば屋など沖縄っぽい飲食店もあるが、インドカレー屋や、日本そばと天ぷらなど、かなりバラエティーに富んだ店が並ぶ通りだ。

桜坂通りを下ると、昔ながらの商店街に出た。今はお土産屋が軒を連ねる観光スポット**平和通り**だ。
「ここよ、向田さんのエッセイにある、衣類を扱っている市場」
牧志公設市場衣料部と書いてある。

戦後、この一帯に闇市が広がったことから始まったらしい。

「みんな女性の店主なのよ。あ、エッセイの中ではね。なんでも戦争未亡人たちを中心に、戦後闇市が広がった後、バラックを立て替えた小さいお店から始めたらしいの」

加奈子の解説を聞きながらよく見ると、店主不在のような店もある。僕は物色するには好都合なので、近寄ってみた。

「いらっしゃい」
向こうの店から、おばちゃんが走ってきた。
「このおばさんは今留守だから、あたしに聞いて。何？お孫さんの七五三かなにか探



国際通り



平和通り

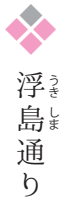
してる？こっちなにないものは他の店にもあるから紹介できるよ」

僕は顔を合わせて笑ってしまった。エッセイの書かれた80年代とまんま同じなのである。女性たちは同じ職種でもみんな仲が良く、冠婚葬祭の付き合いもあるほどだという。だから外出中の店番はお互い様というところらしい。表では扇を並べて売っている



きっぱん

僕は、沖縄の食材にすっかり魅了されてしまった。



浮島通

さすがに、お腹もいっぱい。市場を後に、少し歩こうということになった。

世界級の巨大シーサーがいるという、**浮島通り**に向かう。

壺屋うふシーサーという名のこの巨大なシーサーは、沖縄の守り神だそうだ。

歩いている人に頼んで記念撮影をし、スマホで撮った画像を娘に送ると、すぐに返事がきた。

「はいじゃやつて…ハバママ、20代カップルのようです(笑)」

「フフフ…調子にのって僕らはあることを決行する。」

浮島通りは、長い一方通行の通りにおしゃれ



呉屋天ふら屋



petite rue プチット・リュ



第一牧志公設市場

おしく思えてくる。小さな通りは、沖縄の大きな歴史を教えてくれた。

第一牧志公設市場

「ついに来たわよ、**公設市場**！」

加奈子が興奮している。

「これが邦子が感動した沖縄の胃袋…この景色、行きかう人や商品を運ぶ台車の音…」

「邦子って…」

「あら、いい香り。乾物屋さんかしら」

入り口には乾物屋さんがあり、かつお節の香りがする。沖縄料理というと豚肉料理を思い浮かべるが、出汁に使う鰹節を日本一消費するのも、沖縄の県民性なのだから。

市場の建物内に入ると、色とりどりの新鮮な魚、見たこともないものもいて、眺めているだけでも楽しい。まだ動いている伊勢海老や、ガサミとよばれる力二。まるであの沖縄美ら海水族館に入ったようだ。

そして、やっぱり豚肉。プタちゃんたちの圧倒的迫力に最初は驚くが、なぜか慣れてくる。

ここもやはり女性が多い。切株のような板で豚肉をカットするおばちゃんたちを見ていてだけで、元気をもらえた。

また、魚や肉だけでなく、ゴーヤー、ヘチマなどの野菜も豊富だ。パパイヤも並んでいるが、ここでは野菜として扱われているようだ。新鮮な食材は、2階の食堂でそのまま

調理してくれる。

市場内だけの話ではない。この付近には、屋から1杯が楽しめるリーズナブルな店も多い。

地元おススメ 市場に来たら「コー」と評判の**呉屋天ふら屋**という店に足を運ぶ。

ここでは魚からイカ、野菜、サターアンダギーまで、揚げたてアツアツの天ぷらをいただける。

しかし、天ぷらというよりは衣がたっぷりのフリッター。イギリスのフィッシュ&チップスのようなファーストフードだ。

袋に入った天ぷらを、その場でハフハフと熱いうちにほおばる。実にうまい。

「うまかったね」

「うん、逆にお腹空いてきちゃった」

「ウソー今、天ぷら食べたばかり…」

「へっだって『天ぷら』って沖縄の人のおやつなんですけど…。でさ、行ってみたいお店があるの。市場の食材を生かしたフレンチでも、気軽に行けるとこなのよ」

僕を引っ張る加奈子の反対の手には、お土産の沖縄のドーナツ、サターアンダギーの袋が…僕は加奈子の迫力に身を任せるしかなかった。

「いろいろいませ〜。はい、津島様ですね」

プチットリュという店に着くと、しっかり予約が取られていた。

「カンパ〜イ！」

「うま〜」

前菜でオーダーしたマグロタルタルのうま

「加奈子、今更だけど、きっぱんってなんだい…」

「幻のお菓子。オクニも苦労して探し出した琉球王国時代のお菓子よ」

だんだん呼び名が変わるのはさておき、向田邦子は小学生の頃鹿児島に住んでいて、保険会社に勤める父親が沖縄出張の時に、お土産で買ってきたものらしい。

小さい頃の甘い思い出が記憶の中に残り、作家として成功した1980年代に沖縄を訪れた時に、きっぱんを探し回ったものの、すでに沖縄の人の記憶からも忘れ去られており、訪ねても知らない人が多かったという。

「ということは、戦前？」

「そう、お父さんのお土産って沖縄産ではなく記憶違いだったかとも思ったんだけど、開南ってところにあつたそうよ」

「開南って地番にもない、地名でしょ。30年前の話だし、大丈夫かな」

しばらく2人で尋ねたが、観光客や若者も多く『きっぱん』を知る人はひとりもいなかった。やはり幻のお菓子屋さんはもうないのだろうか。

30年前、僕らが結婚した時にはあつたはずのお店。

手がかりが得られず次第に悲しそうになる加奈子を見て、僕はなんとかして探してあげたいという気持ちになった。

「ここで待ってて、加奈子」

僕は走った。アグーのTシャツを着たボクー

さに僕は思わず大きな声を出してしまった。

「ね、だから言ったじゃないの。全然入るでしょ。那覇は、有数なマグロ水揚げを誇る都市だから新鮮なの。那覇をなめるなよ〜(笑)」

選んでもらったワインもよくて、島の素材ともよく合った。



壺屋うふシーサー



謝花きっぱん店

のぜい肉が踊る。

さっきの居眠りしていた農連市場のオバア、あの人ならきつと知っている。

さすがに60近いと走るのも大変だ。でも走らずにはいられなかった。なぜならあの居眠りオバアが店をかたつけて帰ってしまつたのではないかと思ったからだ。

案の定、お店を開めて引き上げるところだった。

「ハア、ハア…す、すみません」

「なんね〜兄さん、あい、カワイイTシャツ着て。カカカカ…」

金園を見せて笑うオバア。

「ハア、ハア…あの、突然すみません、きっぱんってご存知ですか？ハア、ハア」

「あ〜ジャハナサンね〜」

「いや、きっぱんです。お菓子の」

「うん、だから**謝花きっぱん**よ」



栄町市場



COFFEE potohoto(ポトホト)

「え？」

「きつぱんといったら、謝花きつぱんしかないよ。向こうにあるよ、兄さんが走ってきたところ」

「あ？戻るのですね」

オバアは片付けの手を止めて、詳しく場所を教えてくれた。

「ありがとうございます、ところであの縄なんですか？」

「あ、あれね。兄さんに1つあげよう。いいところがあるからね」

元来た道は登り坂だったけど、足取りは軽かった。オバアからもらった縄のお守りのお陰だろうか。足取り軽く、ちよつと得意気に戻ると、加奈子は困ったような顔で待っていた。

「加奈子、分かったよー」

「ありがとう、こちも分かったよーホラー」

加奈子が最近買ったスマホで地図を見せながら言った。

「な、なら最初から…」

「でもね、地図の見方が全然分からないのよ、沖縄の地名って難しいわ」と僕の言葉をささげるように話した。

県立那覇高校のすぐ近く、国際通りへ抜ける道にそのお店はあった。

なんでも皇室も噂を聞き、お買い求めになったとか。

向田邦子が買い求めたのは先代の時代、今はそのお孫さんで、先代と同じく女性店主であった。沖縄の歴史は女性が作っているの

「そうだった！ありがとうございます」

「私はオーダーは忘れるけど、あなたの予定は忘れないヨ」

おかみさんの気遣いのお陰で、なんとか「ホテルで待つヤギ」への土産を買った。



爬龍船と

那覇大綱モニュメント

翌朝目が覚めると、不思議と酒は残っていない。泡盛が体に合うのか、大先輩にすすめられたウコンのおかげか。

「あら元気ね。おはよう。昨夜は遅かったんじゃないの」

加奈子が起き出した。

眠らない街の朝はどうだろう。朝食前に2人で散歩した。

那覇には大きな祭りがある。10月10日の那覇大綱挽おおつなひきとゴールデンウィークの那覇ハーリーというドラゴンボートレース。ホテルの人が言うには、この2つのお祭りを体感できるものが近くにあるという。

まずは**爬龍船**はりゅうせんへ。目印となる牧志駅に近づくところには昨日写真を撮った巨大な、うふシーサーと同じものがある。どうやらヘアとなっているものがここに設置されているようだ。**(さいおんうふシーサー)**

その向こうに、巨大な黄色い船が見えてきた。爬龍船だ。

ハーリーとは、中国に由来する爬龍船競争の

ではないか？そんな気がしてならなかった。

謝花きつぱんを出ると、暗くなっていた。

「今日はありがとう」

めずらしく加奈子が腕を組んできた。僕は縄のお守りを握りしめた。

ホテルに戻ると、加奈子はすでにきつぱんの包装を解いていた。「甘くほろ苦い…おとなの味よね。ひとつの店でずっと受け継がれてきた歴史を感じる。長年の夢がなかったわ。それにしてもびっくりした、あなたがまだ走れるなんて」

「加奈子のためならね」

「はいはい、それは既読スルー…。それより、きつぱんって沖縄のお酒とも合いそうね」

「そうだね。これをかじりながら泡盛を…そうだー思い出した。加奈子、山羊料理食べに行かない？**栄町**ってところにある**美咲**って老舗」

「ちよつとなによ、夢がなくて、うっとりしている時にそのスタミナマッチョなアビールは！」

「ハハハ。そんなじゃなくてね、むしろ逆。沖縄では滋養にいいと、食べられてきた食文化なんだよ。山羊料理と古酒泡盛の相性は抜群なんだって」

「ちよつとワイルドすぎるわ。あたし、実はコレ食べたいんだ」

加奈子が袋を持ち上げる。さっき買ったサーターアンダギーだ。

「沖縄のおいしいコーヒーと合うと思って買ったんだ。こだわりコーヒーの店も確

か、栄町よ。行く？」

「えっ…今度は僕のリュックエストに付き合ってよ」

加奈子は躊躇する僕にかまわず、**potohoto (ポトホト)**というコーヒー店の店主のこだわり、豆に対する愛情などを話し始めた。「コーヒーは、その土地の水を使うのよね。気温、湿度、ベストなコンディションで淹れたコーヒーと、その土地のお菓子、サーターアンダギーを楽しむのが…」

「分かった、分かった。その通りだ。うん、別行動にしよう」

僕はホテルの部屋を出ようとした。

「ちよつと待つて」

加奈子は、僕の腕を引っ張り、引き止めようとする。

「メン加奈子。山羊はゆずれないよ」「いつてらっしゃいメエ、でも帰りに**ステーキハウス88**で琉球バーガーのお土産買ってこいメエ」

「負けた完全に負けた。ホントに胃袋旅行だわ。分かった。琉球バーガーね」

ヤギを1人残して僕はホテルを出た。



栄町

…といいつつ、これは想定内だった。

宵越しの酒場は、男1人がよく似合う。夜の那覇は老舗だけではなく、その雑多な食文化が現在進行形だ。人気の立ち飲み、ものすごくおいしい餃子のお店。『てびち』という豚



那覇大綱モニュメント



ステーキハウス 88 国際通り店



山羊料理の店 美咲



那覇ハーリー爬龍船モニュメント



壺屋やちむん通り

「えーそれって昨日のお守り？」
お店に掛けてあったのも、これだったんだと納得。
後で知ったが、那覇大綱挽の綱も龍であるという※。龍を引き合っことで雨を呼び、豊作を祈願するというものらしい。僕がもらったのは龍のウロコのようなものか。これは、世界級の御利益がありそうだ。

壺屋

ホテルに戻り、2人で朝食を食べていたら、スマホが鳴る。娘からだ。昨日送信した画像が急に恥ずかしく感じた。

「舞、なんだって？何かあった？」

加奈子は母親の顔になった。

「壺屋に行っただってさ」

昨日送った画像には触れられていなくて少しホッとする。

「壺屋って、あなたが好きな壺屋焼の？」

「そう。舞がおすすめの窯元を教えてくださいんだ。」

「で、昨日の写真には何か言ってる？」

僕は、再び恥ずかしくなってしまう。しばらく黙って、昨日覚えた言葉で返した。

「既読スルー。ははは…照れてんのかもな」

「彼氏とデート中で忙しいのかしら？」

「なんだそれ。わが娘、もらってくれる人がいるだけでもありがたいけどな…」

「ウフフ、さあ、そろそろ出かけますか」

「どこ？」

「…え？」

ビックリする僕の側で、加奈子がこらえきれなくなつて笑い出す。

「あつははは。舞、出ておいで」

なんとそこには、娘の舞が居た。

「ど、どーゆーことだ？」

「そーゆーことよ、パパ、ね、舞」

「な、お前知っていたのか？だましたな！」

「まあまあ、もらってくれるだけでも、とか言ってたじゃないの」

ここで、舞が割つて入り真剣なまなざしで話

「って、舞が？」

「舞が。そしておすすめの窯元がここらへんだよね」

ケータイ片手にキョロキョロすると看板が見えた。

「ごめんくださいー！」

2人同時に大きな声が出た。

「東京から来ました、津島です」
前掛けをしいかにも陶工といった若者が驚いている。真っ黒に日焼けし、口をあんぐりとあけ、白い歯がまるでシーサーだ。

「あああ、いらつしゃいませ。舞

さんのおとおと…」

「はい、お父さんです」

「ははは、はい初めまして、ここで陶工をしています、比嘉龍太といいます、お嬢様をください」



新垣家住宅



南ノ窯



壺屋やちむん通り

「行くんでしょ。壺屋やちむん通りにある窯場へ」
そう、実は出発前に娘にすすめられていたのだ。

娘は修学旅行で沖縄を訪れ、それ以来ちょくちょく沖縄にきている。

僕に似たのか、焼き物が好きだ。

那覇国際通り裏にある焼き物の里は、王国時代の1682年、各地にあった窯場をここに集めたそうだ。

あまり知られていないが、伊万里や唐津、平戸焼や薩摩焼と同じく、あの秀吉の朝鮮出兵の際に、日本に渡ってきた朝鮮人陶工たちの影響を受けているのだ。

しかし、同じように朝鮮人陶工の影響を受

し始めた。馴れ初めや、どうして沖縄に通っていたのかも…。

「既読スルー」

普通の父親としては、そんな態度をとるのだろう。

加奈子は、東京からずっとこの瞬間の僕の顔を心待ちにしていたに違いない。ニヤニヤした顔が、それを物語っていた。

それに比べて、若者シーサー君の顔は対照的だった。彼が何を言っているのか、ほとんど耳に入ってこないが、はにかみながら頭を下げる若者には、正直いい印象しかない。

「イチャリバチョーデー」

覚えたての言葉がつい口を突いた。

しどろもどろになりながらも誠意をもって話すシーサー君の顔に、笑顔に戻った。そして、自作の皿を持ってきた。

「これに、きつぱんを入れて召し上がってください」



けていても、環境が違つと原材料となる土も違い、長い年月を経てそれぞれの場所でも変化してきたということもあり、とても同じように見えないのがかえって面白い。
まずは、登り窯が見事な県指定文化財の南窯を見学。登り窯から下に降りると、陶器製の骨壺が売られていた。それにしてもでかい。これは琉球以来の葬制、すなわち人の死後に遺体を処理する方法やその儀礼に関連して、陶器はその土地の文化を教えてくれる。思想家であり、民藝運動家の柳宗悦をして「大きな美的な財産」と言わしめた伝統工芸だ。また、壺屋焼は素朴すぎるほど素朴であるが、現在は海の魚などの力強い模様が特徴…

彼は僕らがきつぱんを探していたことを知っていた。いや今考えると、加奈子と舞が話していたんだろう。そうだ。きつぱんの店が見つからない時、あの時も僕が居たから、シーサー君に電話もできなかったのだろう。彼の作品は素直で温かみがあり、作者の人間性を感じられた。飾りのない力強く素朴な作品にはきつぱんがよく映える。白い砂糖でつまれた無垢なきつぱんも大切にしてくれるのかもしれない。

(おわり)

ストーリー制作 監修 賀数 仁然

この物語は史実に基づいた内容を元にしたフィクションです。

※1 向田邦子 沖縄豊島旅行(女の人差し指 文春文庫)

※2 綱引は早より雨乞いの儀式である。雨乞いは雲龍を呼ぶとされ、そのため大綱挽の綱を龍になぞらえる考え方がある。

那覇の王道から穴場スポットまで 観る、歩く、食べる！

👑 世界級スポット 📷 フォトジェニックススポット 🍴 琉球八食スポット

お土産屋や飲食店が立ち並び、観光客で賑わう国際通り。

誰もが知る王道スポットから少し足を踏み入れてみれば、

沖縄通が通う店や地元の人々が営む日常の風景に出会える。

那覇まちの温かさと新しく誕生した那覇が誇る観光スポットを巡る

----- 半日散策コース ———— 1 日散策コース

新定番観光コース。

ゆいレール美栄橋駅

● 緑ヶ丘公園

那覇ハーリー／
爬龍船モニュメント

ゆいレール
牧志駅

ゆいレール
安里駅

栄町市場商店街

COFFEE
potohoto
ポトホト

山羊料理の店
美咲

夕暮れ過ぎたら
ここでゴールも
おすすめ



1 🏰

那覇大綱モニュメント

平成26年(2014年)に完成。ギネス認定、世界一のわら綱。男綱と女綱を合わせて長さ約10メートル、重さ約7トンのかぬち部分を展示。祭りの躍動感をいつでも間近に体感できる。

🅑 近隣有料駐車場



2 🏰

平和通り商店街

国際通りから分岐するアーケード街。国際通り沿いのてんぶす那覇の近くから壺屋入口まで(公設市場周辺から浮島通りも含む)続く。お土産屋や衣料店などが並び、沖縄・那覇の活気を体感できる。地元の人や観光客で賑わう。

🅑 近隣有料駐車場



国際通り ゾーン

「きっぱんと器」を巡る



3 🏰

第一牧志公設市場

那覇の台所。アグー(豚)、海ぶどう、島らっきょう等々、沖縄ならではの食材が一同に揃う公設市場。地元客も多く、ローカルな雰囲気を楽しめる。ずらりと並ぶ色鮮やかな魚を買い、2階で調理してもらうことも可能。

🅑 近隣有料駐車場



4 🍴

呉屋天ぷら屋

牧志公設市場近く、「うちな一天ぷら」の人気店。厚い衣に包まれた魚やいか、そしてサーターアンダギーも。市場散策の途中で小腹を満たしてくれる沖縄のファーストフードの定番。

☎ 098-868-8782
🕒 8:30 ~ 18:30
📅 定休無し(行事時 1/1 ~ 3、旧盆翌2日は休)
🅑 近隣有料駐車場



5 🏰

浮島通り

戦後すぐから営んできた古い商店街に交じり、若者に支持を受けるおしゃれな服・アクセサリー等のショップが並び通り。沖縄独特の頑丈なコンクリート造りの建物やがじゅまるが木陰をつくる公園が目に入り、「那覇の下町」とも言うべきのどかな風景に出会える。

🅑 近隣有料駐車場



6 📷

南ヌ窯

(ふえーぬかま)

県指定文化財指定、唯一現存する荒焼窯(あらやちがま)。壺屋やちむん通りを公設市場側から入るとすぐ、大きな木の下に、横に長いほり窯が見えてくる。自分好みのやちむん(焼き物)を探しながら散策途中に立ち寄ろう。

🅑 近隣有料駐車場



7 🍴

COFFEE potohoto (ポトホト)

ゆいレール安里駅からすぐ、栄町市場商店街内にあるコーヒー専門店。各国の厳選した豆を自家焙煎。栄町市場商店街が醸し出す温かい昔ながらの市場の雰囲気の中、ゆったりとコーヒーを味わう贅沢を旅の思い出に。

☎ 098-886-3095
🕒 10:00 ~ 18:00(月~木) ~ 19:00(金・土)
📅 日曜 🅑 近隣有料駐車場



8 🏰

那覇ハーリー／ 爬龍船モニュメント

さいおんスクエア敷地内に平成26年誕生。全長14.5メートル、鮮やかな黄色がまぶしい爬龍船(はりゅうせん)。毎年5月に行われ、多くの人で賑わう那覇市の名物イベント「那覇ハーリー」のモニュメント。ベンチになっており、いつでも誰でも中に座ることができる。

🅑 近隣有料駐車場



9 🏰

さいおんうふシーサー

高さ3.4メートルにおよぶ壺屋焼シーサー。那覇のまちの守り神として、兄弟「壺屋うふシーサー」とともに誕生。国際通り沿い、さいおんスクエア敷地内(ゆいレール牧志駅下)に堂々と佇む姿は必見。

🅑 近隣有料駐車場



10 🍴

ステーキハウス 88 国際通り店

1978年に開業(本店:那覇市辻)し、沖縄ステーキ文化をけん引してきた名店。ステーキを提供する際に切り落とした肉をミンチにして作るパティを、こだわりの四角パンズで挟んだハンバーガーは必食!

☎ 098-866-3760 🕒 11:00 ~ LO 22:00 (Close 23:00) 📅 年中無休 🅑 60席
🅑 P提携駐車場(てんぶす那覇駐車場)あり
※お食事¥1000以上1h無料



若狭ゾーン
story

龍の約束

◆登場人物

成龍 清国人のエリート測量技術者 21歳
舞加那 久米村の女中
久米村の主人 中国の文人趣味にあこがれを持っている豪商
蔡温 福州に留学経験があり、成龍とは旧知の仲
次良 久米村の青年、御用聞き
徐保光 成龍の上司の冊封使、成龍の仕事に信頼を置く
護国寺の住職 医術の心得がある

ここを目的に訪れる観光客が少ないゾーンながら、龍柱をはじめ異文化とのつながりを感じさせる興味深いエリア。琉球王国（現在の沖縄）の中心であった那覇に繰り広げられていた歴史背景を絡めながら、龍柱の秘密が明かされる。

◆プロローグ

嘉慶6年2月16日ー
ガタン…ゴタン…

船がきしむ様な音が響いたかと思うと、ゆっくりと、船が動き出した。

昨年、福建の港から渡航して、すでに8か月が過ぎている。

測量技師である私は、冊封国である琉球への使者として命を受け、尚敬王の儀礼のための船に乗った。清国の貧しい田舎に育った私は、出世のため技術者になろうと福州に出て、働きながら測量と土木を学んだ。

この時、福州にあった琉球館という琉球国の出先機関で働く、蔡温という若者と出会った。華人のように話し、詩歌を詠む教養豊かな琉球人だった。

彼に琉球語を教えてもらい、ついに琉球行きの船に乗ることができたのだ。

仕事は、琉球での測量と、琉球人にその技術を伝えること。

蔡温によると、土木工事の基礎となる測量技術は、琉球ではかなり必要とされているらしい。

この船は、琉球で御冠船といわれ、琉球国との外交儀礼、冊封を行う船だ。

乗船した我々649人は、琉球にとって皇帝の使者となり、全員来賓として扱われる。

最初は、旧友との再会以外、退屈な任務が待っているだけ、そんな思いで琉球へ渡った



久米村 600 年記念碑（松山公園内）

◆舞加那と成龍の出会い

初めて降り立つ琉球の地。那覇に到着すると先ずは、蔡温と会った。彼は港近くにある久米村の出身だ。

蔡温の案内で、久米村を歩く。久米村は、久米三十六世という、明の時代に渡ってきた人々によってできた華人街で、我々華人にとつてどこか懐かしい感じがする村だ。歩いていくと中華風の建物があった。建物はもちろん、特に漏窓や洞門などの庭園技法が見事だ。福州にある文人庭園を彷彿とさせるため、華人仲間の間で福州園と呼んでいるところだ。

ガーン、ガーン、ガーン！

「こつちだ、こつちだ、龍が暴れるぞ！」

久米村の静かな自然に触れていると、騒々しい集団が追い越していった。

「何事だ…」

「成龍殿、最近この辺で大きな白龍が現れるという噂があります。最近、ある家に雷が落ちて死者が出た。しかも葬式の時に禁忌を犯してしまい、龍が怒っているとも噂らの噂なのです」

「それで龍が暴れると？」

「そうです。近々、爬龍船競争もあるので、海難事故につながると恐れています」

「琉球でのハーリーといつやつでしょうか？あれはむしろ龍を呼ぶ意味があると思いませんか」

「この国は迷信を信じやすいのです」

騒がしい琉球人にいささか呆れていると、道端にしゃがみこんで泣いている20歳に満たない若さの女がいた。それほど裕福には見えないうが、かんざしの飾りが洒落ていて、私が見た琉球の一般女性とは少し違っ佇まいがある。

「舞加那か？どうしたんだ、どうしてここで泣いている」

蔡温は顔見知りのようだ。

「蔡温様、白龍がかわいそうで…」

顔を上げた舞加那という娘の顔を見て、私はそれこそ雷に打たれたような衝撃を受けた。

「久米大通りに出る白龍を退治しようと、天宮で祈禱をしているの。あれでは龍がかわいそうだわ」

「それは、龍の呪いではありませんん！」私は思わず叫んでいた。

仲島の大石





あまがし（沖縄ぜんざい）

「先ほどからこの道を歩いていて思ったのですが、ここはきれいな龍脈が通っている。この先の仲島（仲島の太石）、風水では、あそこ大きな岩は如意宝珠と解される。つまり、龍の呪いどころか、この地は龍に守られているということになります」

「龍が守っている？」
「舞加那、この人は清国からやってきた華人で、風水の知識に精通していて信頼できる人だ」

「成龍といいます。私が皆さんに、説明してみます」
つい調子に乗ってしまい余計な仕事を引き



ら庭自慢をしたららしい。舞加那はいるだろうか…。私は、文鎮代わりに使っていた琥珀を懐に入れた。舞加那に会えた時のお土産だ。

次良に導かれ、久米村の主人の家に向かう。ふと、大きな樹木に目をやると大きな蝶が舞っていた。ふわふわと踊るように優雅に飛ぶ。

次良が言うには、あの蝶はオオゴマダラとい、琉球、いや日本を入れても一番大きい蝶だという。大きくて目立つので鳥に狙われるのではないかと思っただが、体内に毒を持っている、鳥たちは近づかないそうだ。

屋敷に到着すると、早速あずま屋で待ちわびた主人の庭自慢を聞かされた。そこには舞加那の姿は見えない。出された琉球菓子のきっぱんがすすむ。

私は、手持無沙汰で、キョロキョロしながら舞加那へのお土産の琥珀をいじっていた。「ところで御主人、この前、親切にしていたいた…若い女性、確か…」

「舞加那ですか。そっだ、ちょうどここから見える庭を背景として、この辺りを舞台と



受けてしまったが、意外にも、あっさりとは進んだ。蔡温の援護もあったが、冊封使の一員であるというだけで私の説明は説得力を持っているらしい。琉球の人々は納得し、数週間続いていたという白龍騒動はほどなく収まった。舞加那は嬉しそうだった。

「成龍様、お礼をさせていただきます。そっだ、ちょうどハーリー用のあまがしを作ったのよ。食べていらつしやらない？蔡温様のお友達達の冊封使様が来るとなれば、旦那様も大歓迎よ。ブクブクー茶もあるからほら、早く」

背中を押され、私たちは舞加那の『主人』宅へ向かった。そこは、この辺では割合に裕福な家のようだった。恰幅の良い老主人は、すぐに我々を中に招き入れ、歓迎してくれた。あずま屋に通されると、舞加那が無邪気に笑いながら、あまがしを運んでくれた。押し麦と、豆で作られたあまがしは、端午の節句にいただくという。

一緒に出てきた、ブクブクー茶には驚いた。泡をもったお茶で、上に落花生の粉が振りか

見たてることで…」

パン、パン。

主人の手が鳴る。

「おーい、舞加那、ひとつ披露してくれ」

しばらくすると、きれいな衣装を身に付けて出てきた舞加那が庭園の池の前で琉球の舞踊を見せてくれた。

琉球の芸能はすでに首里城で何度か見たことあったが、女が踊るのは初めて見た。

ただただ、素晴らしかった。琉球の洗練された踊りと音楽。そして、天女のように舞う舞加那に私は目を奪われていた。

しばらく呆然としていた私に、

「お気に召しましたか？」と主人が聞いてきた。

「あ、ああ。とても舞がうまくて見とれていました」

「本当は『加那』といいますが、この通り舞がうまいので、舞加那と呼ばれています。父親が亡くなり、家の事情で辻の遊郭に来たようです。まだ、見習いなのに芸事がうまく辻でも10年に1人の逸材と評判で。しかも、器量もイイ。先日、大金を積んで女中として身請けしたんですわ。ほらウチ、商売をやりますから、客人が来るとこうして舞を披露させているんです」

「ああ、そっですか、彼女は貧しい家の娘でしたか」

平静を装ったが、琥珀を強く握りしめる自分がいた。

それは公人としての私ではない、心の底か

けてあり、中にはあられるようなものが沈んでいる。これは那覇の名物だそっだ。主人は、私が測量や土木の知識があるということを知り、あれこれと庭の事を相談してきた。我が国の文人庭園に近づけたらしい。私の助言に主人は上機嫌だった。

◆ 那覇ハーリー

それからしばらくして、わたしの宿を舞加那が訪ねてきた。

「たまには、海を見るのもいいものですよ」
少し公務が残っていたが、しばし筆を休めて那覇ハーリーを見物にいった。

泊、久米、那覇という3組が、大きな龍の船に乗り競争をする。各地区から選ばれた男たちの真剣勝負だ。

ジャーン、ジャーン、ジャーン
銅鑼の音が鳴り響き、競争が始まった。観客の熱狂する声に、舞加那の声が重なる。

「久米頑張れー！泊、那覇になんて負けるなー！ホラ、成龍さんも応援して。黄色い船が久米よ。あなたの国を表しているの。黒の泊は琉球、青の那覇はヤマト（琉球王国時代における『日本の呼び方』を表しているの（※1））
「そ、そうか。加油！（ジャーヨー）、加油！加油！」

「うん。久米、加油！、久米、加油！」

いつのまにか2人とも中国語で応援していた。

結局、今年の勝負を制したのは泊だったが、

ら湧き出るようなひとりの人間の感情であつた。
踊りを終えた舞加那が、深々と頭を下げた。舞加那との間が、急に遠く感じた。国の違い、生き方の違い…なんとも表現できないが、相容れないにかだった。

私は、琥珀を懐にしまったまま、公人として乾いた拍手をしていた。
頭をあげた、舞加那はあの笑顔だった。

しかし、私は以前とは違う顔つきだったのだろう、舞加那の顔に一瞬不安が見えた。私に近づいた舞加那は、丁寧にもう一度頭を下げた。

「本日はお越しいただきありがとうございます
した」



オオゴマダラ



上天妃宮跡の石門

競技が終わった男たちは互いの健闘をたたえあっていた。これもこの国の気質なのだろう。

「あく残念。負けちゃったね、成龍さんの国」
「え？久米ではなくて？」
「ハハハ。大きな国の人のくせに、小さいことは気にしない！」

舞加那が笑う。つられて私も笑った。心の底から笑ったのは久しぶりだ。考えてみると、琉球の人々はよく笑う。それは未来に進むために笑っているのだ。この国にいくと、公人としての立場や、人を押しのけて出世しようとする自分を笑い飛ばすことができた。

◆ オオゴマダラ

私は公務に追われ、舞加那の笑顔を思い出しながら退屈な時間を過ごしていた。用がないので、舞加那に会うこともない。私は、皇帝の使者の一員という自分の立場を恨めしく感じた。

「ダブリーサビラ、成龍様、メンシエビーガヤ（ごめんください）。成龍様いらつしやいますか、私は次良という者で久米村から使いで来ました」

次良は舞加那と同じく、あの久米村の主人の使用人だった。

彼が言うには、主人が庭を見てもらいたいという。私の助言を受け、庭が完成したというのだ。お礼に食事をとのことだが、どうや

かしまった言葉は、まるで全てを知った私を見透かしているようだった。

「ま、待つてください」

舞加那のうしろ姿に、声を絞り出した。

「と、とてもよかったです。これを持っていきなさい」

奥に下がろうとした舞加那を引き留めるように、琥珀を差し出した。

「これを。虫が入ってます。ムカデが何かかもしれないませんが、私の国では龍が閉じ込められているといつて人気のものです」

主人が目を見ているのが分かった。龍の琥珀は、福州でもそう見られるものではない。彼の趣味からしても、のどから手が出そうな代物だろう。

「よろしいですか」

「ああ…」

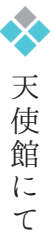
「どうもありがとうございますー龍琥珀、大切にします」

受け取った舞加那は、笑っているのか泣いているのか分らない顔をしていた。

帰りは舞加那が送ってくれたが、宿に戻る途中、偶然蔡温に会った。蔡温は困ったような顔をしていた。

「成龍様、少しまずいことになるかもしれませんが、その時はお力を…」

蔡温は、舞加那をチラッと見てそのまま去った。その近くをオオコマダラが優雅に舞っていた。



天使館にて

帰ると、徐葆光様から呼び出しがあった。急いで**天使館**に参ぜよという。

彼は、冊封使一行の中でも2番目の地位、冊封副使である。今回私を、技師として引き抜いてくれたのも彼だ。琉球国との交渉では、実質的な最高責任者である。

「成龍、こんな時にどこに行っていた」

いつもは冷静な徐葆光様が、苛立っていた。

「申し訳ありません。久米村の知人宅へ造園について少し」

「例の…か。いやなんでもない」

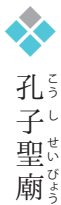
「如何しましたか？」

「琉球との交渉が、うまくいっていない。通例だと、我々が船で持ち込んだ品を琉球王府

その時の私には、怖いものはなかった。ただ彼女を守りたいという思いだけだった。

私は安宿を見つけ、舞加那にはしばらく身を隠すように伝えた。

私は精力的に働いた。舞加那のところへ行くこともあったが、仲間の華人たちにはれないように慎重にことを運んだ。琉球の窓口となつて交渉にあたっている蔡温さえも気づいていなかっただろう。舞加那は、匿われている場所で自分の田舎の料理を私に振舞ってくれた。質素だけど心のこもった、優しい料理だった。そういえば、1度だけ2人外に出た。事情を知っている次良から借りた着物で、男に変装した舞加那と琉球人になりすました私で、那覇の大綱挽を見に行ったのだ。琉球の綱挽は夜に催されるため見破られることはなかったが、徐葆光様と王府高官とすれ違った時はさすがにドキドキした。厳しい交渉も、むしろ公人としてやりがいのある仕事となった。本当に充実した毎日だったが、不安がないわけではなかった。ひとつの仕事を片付くということ。それは帰国を意味していた。



孔子聖廟

私の仕事は、買取騒動の鎮静化だけではなかった。首里王府との儀礼、接待。そして徐葆光様が王府と約束した、琉球人測量技師を育成指導するという仕事も新たに加わった。

が買い取るのだが、今回は全てを買い取る銀が用意できないと言ってきた。この役得を期待してついで来た船乗りもいる。不満を持った者が、あちこちで騒動を起こしているらしい」

蔡温が言う、『まずいこと』とはこれが…。

「持ち込んだ商品を船ごと燃やすという噂まで出ている。このままでは琉球との外交も、いや帰国もままならないかもしれん。琉球語が出来るお前に、騒動鎮静化の役を任ずる」

「かしこまりました」

「それから…」

徐葆光様は、出て行くこうとする私の背中に、ゆっくりと問いかけた。

「成龍、一時の情愛に溺れるなよ。お前には未来がある。そのために努力してきたのではないか。船が沈むのはゆつくりだが、気づくのが遅ければ一瞬で命取りだ。ましてや、今日から琉球人と交渉の仕事だ。弱みを見せるな。あの女とは別れろ！」

「…はい」

私の行動が、徐葆光様に報告されている。どうやら、華人の中に誰か私の足元をすくおうとする者がいるようだ。私は蔡温の元に走った。



天妃宮

蔡温はすでに動いていた。珍しモノ好きのあの久米村主人にあたりをつけて、持ち込

昼は通常業務、夕方からは受講者を集めて**孔子聖廟**の中にある、**明倫堂**で教えていた。仕事に忙殺されていたため、舞加那とは2か月逢っていないかった。

「ですから、道具にはもちろん、測量する者同士に誤差があるとドンドンずれていきま

んだ品を売ろうとしていた。しかし、彼が欲しいのは龍の琥珀だという。商品の中にそれが含まれている事が買い取りの条件だと言ってきたぞうだ。

私は頭を抱えて蔡温の家を出た。あたりはすっかりうす暗くなっていた。

天妃宮の前に来ると人影があった。舞加那だった。

天妃は福州の航海安全の神様だが、信仰心の篤い琉球にもお宮があるのだ。琉球の人々は嵐の時、小さな船を繋ぎ流されないようにする。そんなことから縁結びのご利益もあるようだ。徐葆光様の顔が浮かび、私は物陰に隠れて様子をうかがった。舞加那は何か握りしめて祈っている。

それは龍の琥珀だった。

私があげた琥珀を握りしめ、祈りながら彼女は泣いていたのだ。

「舞加那！」

もうどうでもよかった。公人としての私が崩れる音がした。私は彼女を抱きしめた。舞加那も私の胸に顔を押しつけ、泣いている事を悟られない様にながら抱きついてきた。

「わあああ、ごめんなさい、ごめんなさい」

「どうした」

「あの男、ご主人様が、借金のかたに琥珀をよこせと。それであたし、これだけは渡さないうて。だって、これは成龍様からいただいた…」

「お、落ち着いて舞加那」

す。そして…」

明倫堂の窓に人影があった。

「遅れてすみません」

引き戸が開き入ってきたのはなんと、男装した舞加那であった。一瞬驚いたが、幸いにして皆、話に熱中していて気付いていない。気付かれぬように平静を保とうとする私を見て、舞加那はつけひげから赤い舌を出している。

「よし、皆さん道具を持ってしばらく訓練しててください。遅れてきた君は、別に指導しますので、こちらへ来てください」

別室に舞加那を連れ込んだ。

「おいおい、どういふつもりだい」

「それは、逢いたかったからでしょう？冊封使様！」

「シーシー、小さい声で！」

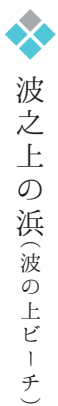
「では、今日こそは逢いに来てくれると約束してください。さもなくば…」

息を大きく吸い込む舞加那の口をあわてて押さえた。

「分かったから。この後行くから！」

「では、**波上宮**でお待ちしております」

舞加那は踊るように、孔子廟から出て行った。講座を終え、私は足早に波上宮に向かった。



波之上の浜（波の上ビーチ）

とつくに日が暮れていた。このくらいの時間になると、月以外見ているものはない。**波上**

「あ、あの男がとりあげようとしたので…叩いて飛び出してしまつて…」

「なんだ」

「え？」

「殺したのかと思いましたが」

「まさか！」

「ですよね。ハハハハ、舞加那、笑おう。こんな時は、笑おう」

「ハハ…」

舞加那は突然の私の催促に戸惑っているようだった。

「がはははは、はい。舞加那笑って、加油（ジャヨー）！」

波上宮



宮には日本を作った神様イザナミが祀られているという。隣には仏教の**護国寺**が並ぶ。神仏習合の信仰文化は日本にもあったが、琉球の人々は、さらに天妃宮や**天尊廟**（てんぐんどう）先ほどの孔子などの我が国の神様も信じている。信仰の世界でもチャンプルー文化なのだ。

柏手（かしで）を打つと、境内に隠れていた舞加那が出てきた。今日は月も欠けていて、見えにくい。私は今夜、舞加那に求婚するつもりだった。帰国はせずに、琉球で測量の講師として生きる覚悟だった。そうすれば舞加那も安心してくれるだろう。

暗闇に、舞加那が震えているように見える…。いや、違う。後ろから、顔を隠した男どもがら、6人出てきた。

「逃げて！」

舞加那の声が早い！一瞬の差で、そのうちの2人が襲い掛かってきた。私は、持っていた測量用の竿を使って応戦したが、後ろから石のようなもので殴られてしまい、徐々に意識が朦朧としてきた。

「悪く思っなよ、仲間に嫌われるお前が悪いのだ」

何発殴られただろう。動けない私は海に投げ込まれた。水面の向こうから聞こえる舞加那の声がボコボコという私の息の音に消えた。



護国寺にて



護国寺



年を越してしまったな。これまでのことは去年の事として忘れろ。2月16日にここを發つ。いいか、帰国したら「官吏としてやりなおせ」

船出までの私は、まるで抜け殻のようだった。波之上の海で舞加那を1日中待つていたこともある。柏手もむなしくなるだけで、彼女は現れない。

「舞加那 逢いたい。龍に憑りつかれていてもいい。あなたに逢いたい」杖をついて探した。天妃宮にも孔子廟にも、綱挽の場所や、ハーリーの海にも舞加那の姿はどこにもなかった。

三重グスク

嘉慶6年2月16日 ― 順風

我々の船は錨をあげ、ゆつくりと進みだした。船が岸から離れると、三重グスクが見えてきた。**三重グスク**には見送る琉球の人たちがいて、我々の船に手を振っていた。

「成龍様、お氣をつけて…」
一瞬、舞加那の小さな声が聞こえたような気がした。

「こっちは、こっちは、おーい」
蔡温の声がする方向を採した。

「舞加那！」
三重グスクの端に、護国寺の住職と蔡温に連れられた、お腹が大きくなった舞加那の姿があった。

「舞加那、舞加那！」

「…ツイタタ」

長い夢から覚めたようだったが、痛みがある。夢ではなかったのだろう。そして、それは私が生きている証でもあった。

「目を覚ましなされた。もう大丈夫だ」
野太い声に、おそろおそろ目を開けると、安堵する僧侶の姿があった。

「どうやら、護国寺で救護されたらしい。」
「あなたは、もう3か月、生死をさまよっていたんですよ」

「舞加那は!？」
様子を伺おうとすると激痛が走った。

「しばらくはまだ安静にしておいたほうがいい。舞加那といったか、あの娘はあなたの命の恩人ですよ」

「では、舞加那は無事ですか？」
「うん、小さな体で、血だらけの貴方をおぶつてな」

「住職、舞加那はどこにいますか？怪我

彼女は、琥珀を持った手を大きく振り、時折りうなずくようにしていた。

私は、ためらいもなく大声で泣いていた。嗚咽で言葉にならなかったが、彼女の名を叫び続けた。

小さくなる三重グスクの群衆の中に、身重の彼女は消えた。船中で私はすぐに手紙を書いた。舞加那、そしておそろく会つことのできない我が子を思い浮かべながら…。

舞加那

こんな形で帰国してしまった私を許してください。私たちの子は産まれましたか。あなたは元気ですか。その子は、男の子のような気がします。彼の名前に、私の文字「龍」を付けてください。私の贈った龍の琥珀を売れば、しばらく凌げるでしょう。子どもに十分な教育を受けさせてください。私に似ていれば手に職を持つようになるでしょう。土木、石工…：福州に着いたら書物を送ります。琉球国の役に立てる人間に育つてくれることを夢見しています。できれば彼に、港に龍を創るよう言ってください。私と子ども、2頭の龍が、あなたと琉球を永遠に守ります。そして、いつか私も生まれ変わって龍の港を訪ね、あなたや子どもに逢いたいと思います。ずっと愛しています。

(おわり)

ストーリー制作・監修 眞数 仁然

この物語は史実に基づいた内容を元にしたフィクションです。
※1 現代では黄色（久米、黒）泊、緑（那覇）と呼ばれるが、殷の尚、琉球王朝時代は緑を「オール」（書）と呼んでいた。

しているのですか？」

「今は会えない。でも大丈夫だから安心なさい」

「お願いです。会わせてください」

「目が覚めれば、貴国の仲間が迎えに来る手はずだ」

「嫌です、私は琉球で生きることを決めたのです。舞加那はどこですか？」

「…会わない方がいい」

「どうしてですか、私の妻です…まだ了解はもらっていませんが」

「彼女の体に龍が憑いたのじゃ」

またか。この連中は龍が暴れるだの、龍に憑かれるだの…寺の僧侶までこの調子か！「お願いします。彼女に伝えなければならぬのです」

ガラガラ…遠くで引き戸が開く音がした。「蔡温です。成龍さん、意識が戻ってよかったです」

「蔡温…例の件、3か月も…申し訳ない」
目くばせをすると、氣を使った護国寺の住職は席をはずした。

蔡温に詫言を入れたが、どうやら例の騒動は彼がどうにかまとめたらしい。そして我々の船も、ひと月後に那覇を出港することだった。

「徐葆光様はお怒りでしょうね」

「いえ、徐葆光様は、あなたの琉球での仕事を評価していました。あなたのお陰で琉球に優秀な測量技術者が育っています。国王からも感謝とあなたの処分を穩便にという

嘆願も出ています」

「琉球の…国王様か？」

「はい。琉球の女性とも別れたとのことで、徐葆光様は今回の件は不問にし、このまま帰国すると」

「わ、別れた？」

「はい。あなたの仲間が、舞加那を説得してくれて」

「ちょっと待ってください、蔡温。仲間とは誰ですか？私は舞加那と結婚するつもりです！」

蔡温の胸ぐらをつかんだが、彼は悪くない。ともすると国際問題になりかねなかった騒動の後だ。蔡温も、そして住職も、最後まで誰が舞加那を説得したのか教えてくれなかった。

さらに半月後、私はようやく歩けるようになり、護国寺から出るようになった。手当をしてくれた住職に礼をいい、わずかばかりのお金を渡した。そしてもう一度、舞加那に会わせてもらうように頭を下げたが、

「まだ、彼女の体の中には龍がおる。龍が出てくれば、いつか会えることもあるだろう。この十分すぎる金は、彼女の生活費に充てるので心配しないで帰国して欲しい」と返すばかりであった。

いつか会える。わたしは住職のまつすぐな目を信じようと思い、寺を出た。

そのまま大使館に向かい、今回の一件を徐葆光様に詫言、感謝した。

「成龍。もついい。お前も傷ついた。この国で



龍柱

琉球王国、大貿易時代に 思いをはせる旅

👑 世界級スポット 📷 フォトジェニックススポット 🍴 琉球八食スポット

沖縄が「琉球王国」であった当時、港に隣接する若狭ゾーンは対中国貿易の重要な拠点。特に久米村（クニンダ）には物語にも登場する中国からの冊封使という使者が多く住んでいた。そこかしこに残る歴史を感じることでできるコース。

----- 半日散策コース ----- 1 日散策コース



1

クニンダテラス (久米村 - クニンダ)



琉球王国や久米村（クニンダ）の歴史文化に触れることができる歴史展示室（無料）や飲食店からなる複合施設。

🕒 9:00 ~ 18:00
🌧 水曜（水曜が祝日の場合は翌日休） 🆓 無料
📞 クニンダテラス管理事務所
098-943-6078(9:00 ~ 18:00)
🍽 グッドファームズキッチン(カフェ / レストラン)
🕒 [月～金]11:00～16:00(料 理 L.O. 15:00)
🕒 [土・日・祝]11:00～16:30(料 理 L.O. 16:30) ドリ ン ク L.O. 16:30、[全 日]17:00～23:00(料 理 L.O. 22:00) ドリ ン ク L.O. 22:30
📞 098-988-9789
🚗 福州園向かいの有料駐車場

2

福州園



四季折々の花木の間を回廊でめぐる中国式庭園。夜間ライトアップ(開園時間は季節により異なる)が人気。貸切対応も可能。那覇空港より車で約10分。国際通りより徒歩約10分。

🕒 9:00 ~ 18:00
🌧 水曜（水曜が祝日の場合は翌日休園）
👤 【個人】高校生以上 200円、小人 100円
【団体(20人以上)】高校生以上 160円、小人 80円
※小学生未満無料 ※夜間開園時大人個人 600円、小人(小学生)個人 300円
🚗 福州園向かいの有料駐車場
📞 クニンダテラス管理事務所
098-943-6078(9:00 ~ 18:00) 🌧 水曜

若狭
ゾーン

「龍の約束」を巡る



3

久米至聖廟

(くめしせいびょう・孔子廟)

儒学の祖・孔子とその門弟(四配:顔子・曾子・子思子・孟子)を祀る廟。孔子や四配の塑像を安置して17世紀半ばに落度(らっけい・落成)。その後第2次世界大戦で廟など全て焼失したが、若狭での復興を経て、久米の地に平成25年建立。

🚗 近隣有料駐車場



4

明倫堂

程順則名護親方(ていじゆんそくなごうえーかた)が王府に願ひ出て建設された琉球初の公立学校。久米村の子弟に儒学を中心に中国の公用語、外交文書の書き方などを教える学問の府。現在は公開講座「久米孔子塾」が開設されるなど市民に開かれた施設。

🚗 近隣有料駐車場



5

天使館跡

冊封使(天使)のための施設・宿舎跡。16世紀前半にはあったとされている。冊封使の渡来は三山時代から1866年まで23回を数え、400～500人が夏から冬の約半年間滞在した。崇元寺(そうげんじ)で故琉球国王を弔い、首里城で新国王の冊封を行う国王一世一代の大事であった。現在は旧跡標示のみ。

🚗 近隣有料駐車場



6

上天妃宮跡の石門

(かみてんびぐう)

那覇市重要文化財・史跡。10世紀後半以降中国にて広く信じられている航海の安全を守る神、天妃。14世紀終わりには中国福建省より琉球王国へ来た職能集団久米三十六姓とともに天妃信仰が伝わった。15世紀半ばごろに作られた上天妃宮の石門が残る。

🚗 近隣有料駐車場



7

千日

1962年創業の沖縄風かき氷の老舗。ふわふわ大盛の水の下にほよい甘さの金時豆の「アイスぜんざい」300円。創業者から受け継ぐ変わらぬ味を守り続けている。

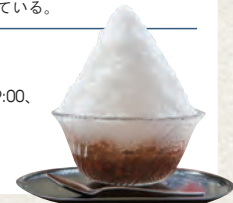
☎ 098-868-5387

🕒 11:30 ~ 20:00

※冬期 11:30 ~ 19:00、

🌧 月曜 🍽 34席、

🚗 あり(普通2台)



8

波上宮

琉球八社の第一位、沖縄総鎮守の社。沖縄の海の彼方にあるとされる海神の国を拝むニライカナイ信仰。その霊応の地であり、貿易の玄関口でもある場所に立つ神社。琉球の時代より航海の無事と感謝の祈りが捧げられ、地元では「なんみんさん」と親しまれる。

🚗 あり



9

護国寺

14世紀半ば当時の王、察度(さつと)により琉球王国の祈願寺として建立された。それ以降王が即位する際には家来数百名と共に参詣し、本堂において君臣の縁結びの盃を取り交わしたとされる寺。

🚗 あり



10

仲島の大石

(うふいし)

那覇バスターミナル構内にある高さ約6mの大きな岩。下部の丸くへこんでいる部分は、海水によって削られた跡。付近は明治初期に埋め立てられており、岩のある場所はかつては海岸だったとされる。県指定天然記念物。岩には拝所もあり。

🚗 近隣有料駐車場





那覇の フォト ジェニック 10選



Naha Photogenic Point10



文化あり、歴史あり、
「かわいい」あり、夜景あり…
那覇市内に数ある
フォトジェニックポイントから
10コを厳選！
周辺観光地やグルメスポットと合せ、
「沖縄」「那覇」をテーマにした
特集や企画等で
ぜひご活用ください。

5 首里 金城村屋

一般開放されている沖縄古民家風の休憩所。
絵になるポイントがいっぱい。
地元の方も利用するため、撮影時は節度を持って。

#古民家 #首里 #金城町
#旅の休憩 #traditionalstyle
MAP:P9/A-4



6 ゆい レール 那覇 空港 駅

日本最西端の駅是那覇市にある。
那覇空港直結のゆいレールの駅。
改札前の緯度経度が書かれた場所でパチリ。

#日本最西端 #那覇空港 #ゆいレール
#沖縄到着 #はじまり



7 新垣 家住宅

壺屋やちむん通りからすぐ、国の重要文化財。琉球王朝時代から唯一残る陶工の住宅。塀に埋め込まれたシーサー達がかわいい！

#壺屋 #やちむん #シーサー #琉球王朝 #焼き物
MAP:P19/C-4



1 パラ ソル 通り (旧呼称 丹前通り)

第一牧志公設市場からすぐ。カラフルなパラソルの下にベンチとテーブル。雨の日は傘をもってこんな1枚を。

#パラソル通り #雨 #すーじぐわー #colorful #雨でも楽しい
MAP:P19/B-3

8 福州 園



撮影スポットとして知人ぞ知る中国式庭園。
園内を巡る回廊、池を渡る橋の上などあなただけの
特別なカットを探しに行こう。

#福州園 #庭園 #回廊 #ライトアップ #中国式 #夜景
MAP:P29/C-3

4 真珠 道



16世紀に造られた首里从那覇港にかけての
約9kmの軍用道の起点付近。
道を覆う緑と注ぎ込む陽光が写真を美しく彩ってくれる。

#真珠道 #琉球王朝 #緑のトンネル #首里あき #首里城
MAP:P9/B-3



2 首里 金城町 石畳道

金城町に300mのみ残る16世紀に造られた道。
琉球王国時代の雰囲気そのままに。まるでタイムスリップしてみたい！

#琉球王朝 #タイムスリップ #琉球 #Ryukyu #首里
MAP:P9/A-4

3 崎山 公園



那覇の夜景一望スポット。たどり着くまで、やや道が狭いため、
特に夜は十分注意して訪れよう。

#崎山公園 #夜景 #那覇まち夜景 #首里 #穴場夜景
MAP:P9/C-4



9 南又 窯



唯一現存する荒焼窯(あらやちがま)とたくさんの
赤瓦を根っこで抱え込むがじゅまるの木。壺屋が重ねてきた歴史を感じる1枚。

#やちむん #荒焼窯 #文化財 #がじゅまる
MAP:P19/C-3



10 クル ーズ ミナ ズル

海外・国内からの多くのクルーズ船が到着する場所。
高層ビル並のインパクトを誇る姿は圧巻！特に夜景がおすすめ。

#クルーズ #世界とつながる #夜景 #那覇港 #totheworld
MAP:P29/C-1



琉球八食

Ryukyu 8 Foods

その①

うちなー天ぷら

#ふわふわ #あちこーこー
#地元ではおやつ



おやつ感覚で食べる、ふわふわ、ぼつとり厚い衣の天ぷらが沖縄流。定番の具材は白身魚やイカ、ゴーヤ等。

その②

那覇マグロ

#新鮮 #那覇はマグロ天国



沖縄県は全国でも有数の生鮮マグロの産地。那覇市はその約半数の水揚げ量を誇り、年間を通して旬の味を楽しめる。

その③

琉球コーヒー

#那覇のトレンド #スタンドで一杯
#深い味わい



有名コーヒーショップが点在、コーヒー好きにはたまらない街。那覇観光客・地元客が行き交う各市場周辺等、人が集まる場所に「コーヒー」あり。

その④

琉球バーガー

#横長パンズ #ジューシー
#自分で挟む



アメリカ統治の時代、牛肉の直輸入で美味しい肉を気軽に食べられ、食文化が根付いた。沖縄ナイズドされて今に残るハンバーガーは必食。

那覇のイチオシ
鉄板グルメ&
NEWグルメ!

その⑤

ポークたまごおにぎり
(ポータま)

#スパム最高
#おにぎりなおかず



沖縄のソウルフード、スパムと玉子焼きが挟まれたおにぎり。油みそや昆布の佃煮、ゴーヤの天ぷら等トッピングしても◎。

その⑥

山羊料理

#スタミナ満点 #臭くない
#一度食べたらずみつき



臭くてクセになる味。刺身や温かい汁で、スタミナ料理であり、地元のお祝い料理でもある。「ヒージャー」とは山羊のこと。

その⑦

沖縄ぜんざい

#優しい甘さ #かき氷の新定番
#ぜんざいなのに冷たい



「ぜんざい」と聞くと温かいお汁粉を想像するが、沖縄では甘く煮た金時豆の上に氷がのったかき氷のこと。夏バテでもバクバク食べられる。

その⑧

ゆし豆腐

#そのままでもいい
#出来立ては格別 #食べ方色々



豆乳にがりを入れて出来上がり。木綿でも絹ごしでもない、いわゆるおぼろ豆腐。味噌汁や沖縄そばに入ったりそのまま醤油と一緒に食べたり。

- うちなー天ぷら「呉屋天ぷら屋」(地図 P19/B-3)
- 那覇マグロ「petite rue プチット・リュ」(地図 P19/B-3)
- 琉球コーヒー「COFFEE potohoto(ポトホト)」(地図 P19/D-2)
- 琉球バーガー「ステーキハウス 88 国際通り店」(地図 P19/B-3)
- ポークたまごおにぎり(ポータま)
「ポークたまごおにぎり本店 空港 1 F 店」(地図 P9/A-4)
- 山羊(ヤギ)料理「山羊料理の店 美咲」(地図 P19/D-3)
- 沖縄ぜんざい「千日」(地図 P29/C-3)
- ゆし豆腐「ななほし☆食堂」(地図 P9/D-3)

「ここで食べよう!」
3つのストーリーに
登場する
おすすめのお店



那覇を訪れたなら
要チェックの
お土産ブランド

「龍柱会議」認定の商品をご紹介します



「龍柱会議」紹介 HP <http://ryuchukaigi.com/>
主催：那覇市「新商品開発支援事業」



那覇市「新商品開発支援事業（平成 29 年度）」で誕生したブランド。
観光資源 7 種をモチーフにしたキモかわいい個性的なキャラクター達が誕生！
「龍柱会議」という統一のテーマによる、バラエティに富んだ
22 種類（市内 6 事業者）の商品が完成しました。
各キャラクターとのコラボ企画も、ぜひご検討ください。

龍柱会議とは

那覇迎恩のシンボルである CE 王りゅうちゅうを議長に、各分野から選抜された代表者が集い「なは土産」を応援するための「龍柱会議」というおかしな商品企画会議がはじまった…。
琉球の歴史を交えながら、那覇の魅力を新たな角度から見直すべく展開される。うちな〜ぐちと笑いを織り交ぜたユニークなストーリー。

うちな〜囃家
志いさーによる

創作沖縄落語
龍柱会議

YouTube 動画配信中！



観るがよい、那覇の世界級を

壺屋 うふシーサー

世界一の壺屋焼シーサー
(壺屋やちむん通り入り口近く)。
300年以上の歴史を誇る伝統の壺屋焼
熟練の陶工が魂を吹き込んだシーサー像。
「うふ」とは沖縄の言葉で「大きい」の意。
「さいおんうふシーサー」は兄弟シーサー。

Map: P19/B-5

西の アザナ

世界級のサンセット。
那覇の街とそれに続く大海原を
見渡すことができる首里城公園内、西のアザナ。
時を隔てて古の王が見ていたかもしれない
風景を眺める、
そんな贅沢が味わえる場所

MAP: P20/B-3

国際通り

沖縄観光の入り口ともいえる
全長1.6km、世界級規模の観光ストリート。
戦後の焼け野原から目覚ましい発展を遂げ
「奇跡の1マイル」とも呼ばれる。
毎週日曜日12時〜18時は歩行者天国となる。

Map: P18/2

那覇大綱 モニュメント

ギネス認定、世界一のわらわ綱
琉球王朝時代の伝統を引き継ぐ、那覇大綱換。
長さ約10m、東西で換き合う綱の
重さ約7tのかめら部分を展示。
ギネス記録を持つ大きなさはばは、
祭りの躍動感を間近に体感できる。

Map: P18/3

龍柱

世界規模の沖縄式龍柱。
高さ15mの2体が対になっている。
那覇と中国福州の友好都市交流シンボル像として
平成23年(2011年)に建設。
海の彼方、ライカナイへと向かい、
豊かさや平和への希求・発展性を表している。

Map: P29/C-2

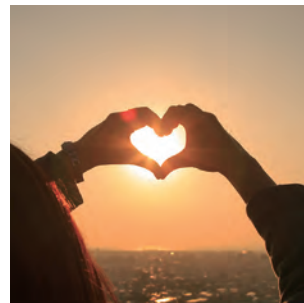
Photogenic World Class - Naha

「世界級」でフォトジェニックな1枚を

#世界級 #Worldclass
をつけてupしよう！



#龍柱
#dragon #dragoncity



#西のアザナ
#sunset #ryukyukingdom



#さいおんうふシーサー
#biggest #yachimun



#国際通り
#kokusaistreet #shopping

